学位論文の要約

【論文題目】

同じものの《永劫回帰》をめぐる

——ニーチエ、ドゥルーズ、クロソウスキー——

【申請者】

山崎雅広

この論文は、一九世紀後半ドイツの哲学者フリードリヒ・ニーチエ（一八四四—一九〇〇）のもっとも中核にありながら謎めいた思想である同じものの《永劫回帰》について、それが一八八一年八月、ジルス・マリーアという特定の時間と場所において啓示された体験であり、それゆえに、その受け手たる主体の二重化を生み、彼を根本的に変容させていく思想でもあるという、二〇世紀フランスの思想家ピエール・クロソウスキー（一九〇五—二〇〇一）によって提示された読解方針でもって思考しようとしたものである。

論文は全体で16節にわかれ、第一章・ニーチエが1節から3節まで、第二章・ドゥルーズが4節から7節まで、第三章・クロソウスキーが8節から15節まで、補論が16節に対応する。以下、この順に本論文がたどった道筋を記述していく。なお、本論文の構造は複雑

であり、前にあつた節で扱われた問いがあとの節で不意に想起されたり、ある節の問題と別の節の問題とが相互に助言を与えあつたりするなど、各節は相互に絡み合っている側面があるが、以下ではなるべく直線的に、論の中心にあると思われるものを述べることにする。

第一章は導入部であり、これより先で展開される主題をあらかじめニーチェに即して展開している。この章で提示されたさまざまな論点は、第二章以降で回収されることになる。

§1.. 発狂はどこまでも発狂の擬態シミュラクルでしかありえないのではないか

本節では、ニーチェの晩年の自我同一性の壊乱という発狂状態が、かぎりなく発狂の偽装と区別がつかなくなっていく有様を、さまざまなコンテクストから立証したものである。具体的には、仮面によつて自己を戯画化しながらそれを次々と打ち倒していく態度、オーヴァベックやストリンダベリの証言、ニーチェ自身がこれから大いなる正午を体現すると述べていたり、血縁関係を否定しようとするなどが、傍証として引かれている。

§2.. ニーチェと魔術師（あるいは高次の魔術師）

前節で検討された、仮面によつて真の自我を背後にかぎりなく後退させていくニーチェ

の思考法を、本節では『ツアラトウストラ』第四部の高^マ等^シな人間たちのうちのひとり、魔術師に見ようとした。魔術師は俳優としてあらゆるものを大げさに演じるが、そうしている自分に吐き気をもよおす、この同じ吐き気が、第四部で主導的な気分となつていもの、こうした魔術師であるときらに見せかけるところに、ニーチェ一流の思考法があり、これを本稿は高次の魔術師と名づけた。

§3…「いずれにせよ」へのジャンプ

——ニーチェにおける《永劫回帰》の二重性について——
 本節では、ニーチェの《永劫回帰》体験が、ある種の《高揚した気分》のうちで到来した暴力的な出来事であったことをテクスト的に立証し、それゆえに、そうした私の蹂躪された体験と、道徳的訓育のための試金石としてそれは私たちに関わりがあると教説のかたちで述べることのあいだにはギャップがあることを示し、この観点から、レーヴィットが「思想の断裂面」がみられると述べたニーチェの断想を検討した。

第二章は第一章で導入された枠組みによつて、二〇世紀フランスの哲学者ジル・ドゥルーズ（一九二五—一九九五）の《永劫回帰》解釈と六〇年代の彼の哲学体系が批判的に検討されている。

§ 4…ドウルーズのニーチェ解釈の理路とその問題点(1)

——ニーチェの《永劫回帰》の存在論化の過程——

本節ではドウルーズが、ニーチェの同じものの《永劫回帰》に対し、差異の《永劫回帰》こそ、真にニーチェが述べたかったことだし、その思想を自らの哲学体系の中核としたことが示された。その際、同じものとはむしろ、差異によつて二次的に構成される《永劫回帰》それ自体だとされ、*éternel retour du Même*の「*du*」が事実上、ドウルーズにおいては、同格の α か、あるいは「 $\sim$ についての」という意味(主題の α)で解されていることが明らかにされた。また本節では、そうした結論ありきのニーチェ解釈において、いかにニーチェに対して強引な解釈が施されるのかを、具体的にテキストに即してみた。

§ 5…ドウルーズのニーチェ解釈の理路とその問題点(2)

——肯定を肯定してもらうことの必要性について——

『差異と反復』と『意味の論理学』といった自身の哲学体系を提示した書物では、最初から《永劫回帰》は万物にかかわる存在論として提示されているが、この存在論化がただ一度だけ、『ニーチェと哲学』で、ディオニュソス—アリアドネのカップルの成立によつて、生成つまりたんなる思想としての《永劫回帰》の実行者が、生成についての存在とい

う存在論へと跳躍することになされることを示した。

§ 6…ニーチエ読解とニーチエ的観点からみたドゥルーズ哲学の問題点

とはいえ、こうした存在論化がなされるにしても、意志に対する選別テストがあいかわらず『差異と反復』でも語られており、こうした選別テストが思想として自覚的に行われべきであるのか、それともこうしたテストが、つねにすでに行われてしまっているのか、判明でない記述が散見されることを指摘し、ここにニーチエの場合と同じ体験／教説の二重性という困難を聴き取った。また『永劫回帰』において、ニーチエの場合では、円環の外には立てず、絶えず自身が二重化することが求められているのに（つまり、『永劫回帰』において語りはかならず自己言及的になるというのに）、ドゥルーズはその外に立つて、まるで見てきたようにそれを語るこの問題が示され、批判的検討に付された。

§ 7…（改めて）ニーチエの思考法

第二章での考察をふまえ、第一章で提示されたニーチエの思考法が、第三章の議論とつながるかたちで復習されている。

第三章はもつとも長い章であり、この論文の中核部分をなす。おおまかには、(1)クロソ

ウスキーの《永劫回帰》解釈が方法的に、そして内容的に検討されたのち、(2)この《永劫回帰》を模倣したかのごとき、『歓待の掟』の《ロベルト》が検討される。

§ 8…クロソウスキーのニーチェ解釈の理路(1)

——その方法面を中心として——

本節では、《永劫回帰》思想と実存を架橋しようとするクロソウスキーが、ニーチェを擬態したことに、《永劫回帰》を読解するための方法論をみようとした。この擬態シミュラークルという手法は、レーヴィットがニーチェとディオニュソスのそれぞれの同一性が確立された平面で演技を思考しようとするのに対し、《神トイウ悪循環》において、演じる者と演じられる者との区別がそもそも失効した水準でなされていることを示した。

§ 9…クロソウスキーのニーチェ解釈の理路(2)

——その内容面を中心として——

前節で検討された方法を前提として、クロソウスキーが《永劫回帰》を、そこにおいて「私」の忘却の困難と必然性が生じた出来事として理解し、忘却がもはや《永劫回帰》体験を忘れることである以上に、この「私」の自我同一性を忘れてしまうことに通ずることを示した。それゆえ、晩年のニーチェの自我同一性の壊乱は、むしろ回帰思想の体现とし

て、望まれるべくしてなったものであり、そこに最高度の明晰さを見ようとするのがクロソウスキーのニーチェ解釈のもつとも過激な部分である。また、こうした方針によって読解せねば、実際ニーチェにおいて意味が通らなくなるテキストが複数あることを立証した。

§ 10…擬態シミュラクルのうちにあるある種の時間感覚について

《永劫回帰》体験以後のニーチェの時間感覚について、擬態シミュラクルという用語を手掛かりにして考察した。そこでは、「時機はまだ来ていない、あるいはすでに過ぎ去ってしまったという」という、「まだくはない」と「もうくある」の間に挟まれた独特の切迫感が支配している。

§ 11…クロソウスキーにおける自我同一性の崩壊にいたる三つの論理

本章で検討されたニーチェの自我同一性の崩壊へいたる「忘却の論理」のほかに、クロソウスキーにおいては、(1)神の死↓自我同一性の崩壊、(2)サドにおける隣人の否定↓自我同一性の崩壊という二つの論理があることを示し、とくに後者について詳述した。

§ 12…精神科医たちからニーチェを取り戻すために

『ニーチェと悪循環』において、ニーチェを精神科医的ないし精神分析家的諸規範から

解放しようとすることは、ひとつの大きなモチベーションをなしているが、クロソウスキーはとくにニーチェ病跡学の蓄積を参照するわけでもなく、梅毒性進行麻痺などの疾患にニーチェの全体を還元しようとする思潮は、いわば了解済みのものであるようにして扱われている。本節の意義は、メービウス以来のニーチェ病跡学の文脈を補うことで、クロソウスキーが闘っていた当の相手の輪郭を描き、かつ、それをクロソウスキーに即して打ち倒すことにある。

§ 13…ニーチェ論の準備と体現という観点からみた『歓待の掟』

——その「あとがき」を中心として——

クロソウスキーの《永劫回帰》読解の前提となる擬態シミュラクルの戦術の準備という観点から、四年の発表以前の諸テクストを位置づけた。ここでは、読み手も書き手も登場人物もが、《悪循環》と呼びうるような同一平面へと落下していく。さらに、六五年に『歓待の掟』が「あとがき」を付加して出版される際、その「あとがき」にはニーチェ論と同じ「忘却の論理」、つまり、思考の極限的な一貫性においてデカルト的な「我思う」から「我」と「思う」が分離するという論旨がパフォーマティヴに繰り返されていることを示した。それにより結果的に、《永劫回帰》の状況のなかに、その原理を知っているものが含まれているという『善悪の彼岸』で描写されたような《悪循環》が、『歓待の掟』という書物に

よって完成されることが立証された。

§ 14…眺めることと等価物について

前節までの議論をふまえ、ニーチェとクロソウスキーがなにを具体的に観ているのか、という問題が扱われている。

§ 15…教育不可能なものを教えるために

——ニーチェⅡクロソウスキーの伝達法と

それゆえに帰結する悲嘆と哄笑の一体性について——
 クロソウスキーは六四年の発表では、『永劫回帰』が圧倒的に真正なものとして啓示されたことから発して思考しているのだが、とすれば、それがある種の『陰謀』のための秘密の道具として活用されるとすれば、それはニーチェにおいていかに正当化されるのだろうか。その答えは、ニーチェとヴァーグナーの差異にあり、魔術師と高次の魔術師の差異にある。ニーチェによれば、あらゆるものの根拠が失われ、なにもものも真ではありえないニヒリズムという正常状態の最中に、良心に恥じることなく偽を自覚的に用いる詐欺師としての哲学者が求められている。クロソウスキーにしたがえば、この観点から、あれほど真であつたと看取されたものまでも、あえて偽として流通させるといふこと、それをニ

ーチエは遂行しようとしたのであり、この段階で、パトスは唯一革命的な行為である、妄想による構築を成し遂げるのである。

補論では、ここまでの理路によつて検討されたことをふまえ、とくにドウルーズに関する先行文献を検討した。

§ 16…先行文献に対する考慮

—— 檜村、クレソール、鹿野 ——

ニーチェークロスウスキーのラインとドウルーズを対置させる先行文献として、まずは檜村によるものを検討した。その読解水準が低いために、その論文の主張として意味のある部分は、ニーチェークロスウスキーには体験があるのに、ドウルーズにはそうした体験の収集活動があるという部分に切り詰められてしまうこと、それゆえ結果的に、「当事者でないのに、当事者のことを語るな!」というクレソールによるドウルーズ批判と見分けがつかなくなることを示した。そこで、このクレソールの批判に対するドウルーズの応答を検討し、それに対する本稿の位置を見定めることで、本稿の意義を再確認した。またドウルーズがいかにクロスウスキーを取り込んだのかについての鹿野の研究を参照しながら、本稿の構図をなす対立構造を、——それが可能なまとめのうちのひとつにすぎないものと

知りつつも、あえて——まとめることを試みた。